

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10866

研究課題名（和文）神経難病看護師による症状看護の促進に向けた新たなリフレクションプログラムの構築

研究課題名（英文）Research on constructing a new reflection program to promote symptom nursing by neurodegenerative disease nurses.

研究代表者

森谷 利香 (Moriya, Rika)

摂南大学・看護学部・教授

研究者番号：20549381

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、神経難病看護師の症状看護における暗黙知を明らかにする、神経難病看護師の感情体験・管理について明らかにする、神経難病看護師の症状看護を促進する新たなリフレクションプログラムを再構築することにある。計画の通り、神経難病看護師の暗黙知および感情体験について質的記述的手法を用いて明らかにした。暗黙知では、神経難病看護師に特有のワザやコツの一部を見出した。感情体験では否定的感情のほか、やりがいなどの肯定的感情や、対処行動についても明らかになった。これらを踏まえたリフレクションプログラムは、自分自身や患者の状況を振り返る機会となり今後の実践に向けたヒントを得ていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

神経難病看護師のメンタルヘルスを含めた感情の問題は、内外を通じて課題となっている。また知識の蓄積が少ないことも看護師の実践を困難にしている。これらのことは、看護の質に直結する。特に、神経難病には根治治療がなく、患者の症状は時間とともに深刻化するために苦痛を伴い、その心理、社会的側面にも多大な影響があることから、看護の質は患者のQOLに影響する。この度、神経難病看護師の暗黙知や感情体験を踏まえてリフレクションプログラムを行うことで看護師の肯定的感情を喚起し、次の実践に向けた手掛かりを見出せたという成果は、学術的、社会的にみて意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to: 1) elucidate the implicit knowledge of neurodegenerative disease nurses in symptom nursing, 2) clarify the emotional experiences and management of neurodegenerative disease nurses, and 3) reconstruct a new reflection program to enhance symptom nursing by neurodegenerative disease nurses. As planned, qualitative descriptive methods were employed to elucidate the implicit knowledge and emotional experiences of neurodegenerative disease nurses. In terms of implicit knowledge, certain techniques and tricks specific to neurodegenerative disease nursing were identified. Regarding emotional experiences, aside from negative emotions, positive emotions such as fulfillment and coping behaviors were also revealed. The reflection program based on these findings provided an opportunity for nurses to reflect on themselves and their patients' situations, gaining insights for future practice.

研究分野：臨床看護学

キーワード：神経難病 症状看護 リフレクション 暗黙知 実践知 感情体験

## 1. 研究開始当初の背景

神経難病患者は、多彩な症状を有することが多く、いずれも日常生活に大きな影響をもたらす。加えて、難病は原因不明で根治的な治療がなく、長期療養が必要である。このことから、神経難病患者が症状を有するという事は生涯にわたる患者の生活の質に直結する問題である。

神経難病患者の症状の中で、例えば痛みに関して、多発性硬化症患者、筋萎縮性側索硬化症患者の多くが痛みを有し、コントロールが不良であることや、QOLに影響しているなど、欧米において神経難病の症状の実態や影響が研究されている(Clemenzi et al, 2014)。我々は、多発性硬化症・視神経脊髄炎患者の経験する知覚異常について、自己の存在を脅かす痛みや、鋭利な道具に準える鮮烈な痛みと捉えており、さらに症状の個人差が大きく生活への影響も多彩であることを報告してきた(山本ら, 2017)。さらに、症状を有する神経難病患者は看護師に対して症状に伴う日常生活および役割の補完、対処へのニーズがあることを示し、患者の症状に伴う苦悩と看護援助の必要性を報告してきた(森谷ら, 2017)。難病法の改定以降、その患者数は平成23年に78万人であったのが平成27年には123万人に増加し、患者の症状看護に対するニーズは高まっていくと予想される。

我々は「神経難病患者の痛みの看護を促進するための神経内科看護師への支援プログラムの開発(16K12046)」の取り組みとして、神経難病看護師に対して看護の促進を目指した支援プログラムを行ってきた。この中で見出された課題は以下の2点で、神経難病看護師へのプログラムを検討するために考慮が必要である。

### (1) 神経難病看護師の「知識基盤」の課題

現在、神経難病患者の症状への看護実践方法が確立しておらず、神経難病看護師は実践において行き詰まりを感じていた(森谷ら, 2018)。患者のニーズに十分対応できる看護実践のための知識の蓄積がなく、神経難病看護師には看護実践上の困難があると考えられる。一方で我々は、神経難病患者に対する看護実践において、看護師の経験に基づく暗黙知や実践知を示唆する結果を得てきた(森谷ら, 2018)。看護師への教育支援プログラムを通してこれらの「暗黙知」を整理でき、これを共有することで神経難病看護の質を向上できる可能性がある。

### (2) 神経難病看護師の「感情管理」の課題

看護実践に関する知識基盤が蓄積されない中でケアを行う神経難病看護師には負の感情体験があり、その「感情管理」も課題と言える。神経難病看護師のバーンアウト得点は、他の診療科部署の看護師よりも高い(安東ら, 2006)。同時に一般看護師用のストレスサー尺度では、神経難病看護師のストレスサーを捉えきれていない。我々も神経難病看護師の不全感について報告し、看護実践に影響しうると考えてきた(森谷ら, 2015)。

神経難病看護師に対する教育的支援に関する先行研究では、講義やグループワーク(上田ら, 2012)、看護研究(佐藤ら, 2014)が散見されるが、十分な体制ではない。我々は神経難病看護師の経験に着目し、リフレクションによる支援プログラムを試行したところ、参加者は自己の実践や看護観を客観的に捉え直し、肯定的な患者理解が進むなど、効果を認めてきた(森谷ら, 2018)。つまり、リフレクションは神経難病看護師を支援する上で一定の成果がある。このリフレクションをさらに効果的に行うための検討が看護の質向上に向けて重要と考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、神経難病看護師の症状看護における暗黙知を明らかにする、神経難病看護師の感情体験・管理について明らかにする、神経難病看護師の症状看護を促進する新たなリ

フレクションプログラムを再構築し、暗黙知の共有、感情管理、患者理解の促進の視点で評価する。

### 3. 研究の方法

#### 第1段階(2019年度～2022年度)

神経難病看護師の症状看護を促進する新たなリフレクションプログラム再構築のための準備

##### 1) 神経難病看護師の暗黙知に関する研究

神経難病看護師の実践における暗黙知を明らかにすることを目的に、質的記述的研究を行う。

##### 2) 神経難病看護師の感情体験・管理に関する研究

神経難病看護師の感情体験・管理を明らかにすることを目的に、質的記述的研究を行う。

#### 第2段階(2021年度～2023年度)

神経難病看護師の症状看護を促進する新たなリフレクションプログラム再構築(図1)

今までのプログラムを基盤に「経験の想起・描写」「感覚・感情表出」「推論」「経験の分析」「評価」「アクションプラン」の順で行うリフレクションとする。さらに主体的なリフレクションを検討する上で Dewey は、経験を通じて学習するために「相互作用」が必要と述べている。そこで、本リフレクションプログラムでは「相互作用」のために、グループ討議による交流の中で効果的なリフレクションを目指す。

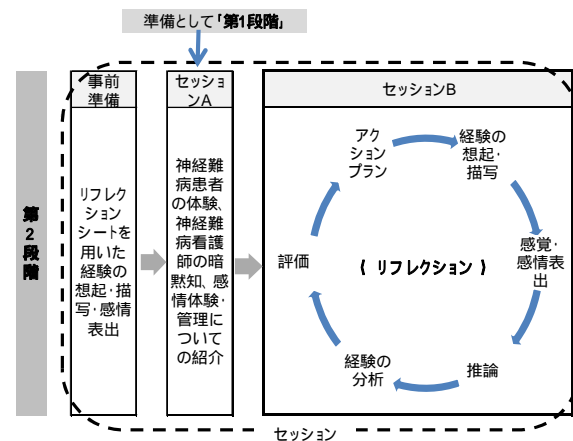


図1 新たなリフレクションプログラム

1) 目的: 神経難病看護師の症状緩和の看護に関してリフレクションと実践の反復を通じて、暗黙知の共有、感情管理、患者理解の促進の視点からプログラムの効果を検討する。

2) 対象者: 神経難病看護のエキスパート5~6名

3) 介入方法: 参加者に以下のプログラムに参加してもらう。

(1) 事前準備: 神経難病患者の症状緩和に関する看護実践とその意味、自分の感情、向き合い方を想起し、振り返る。この内容をリフレクションシートに記述しながら、意味づける(経験の想起・描写、感情表出)

(2) セッション A (導入): 研究者から、過去に明らかにした症状を有する神経難病患者の体験、および第1段階の神経難病看護師の暗黙知、感情体験・管理について紹介し経験の想起・描写、感情表出を助ける

(3) セッション B (発表、共有、討議 相互作用)

事前準備の内容をそれぞれ発表する(経験の想起・描写、感情表出)

に関連して自由に討議する(推論、経験の分析、評価)

次の実践に向けて活用できそうなことや課題、および自分の向き合い方を討議(アクションプラン)

(4) 実践: セッション B- を実践し、再度、事前準備のサイクルに戻ってリフレクションシートに記述する。

#### 4. 研究成果

##### 第1段階(2019年度~2022年度)(一部継続中) 神経難病看護師の症状看護を促進する新たなリフレクションプログラム再構築のための準備

この段階では、神経難病看護師の症状看護を促進する新たなリフレクションプログラム再構築のための準備として、神経難病看護師の暗黙知に関する研究、神経難病看護師の感情体験・管理に関する研究を含めて、神経難病看護師の実践について広く取り組んだ。

まず、神経難病看護師の暗黙知についてはエキスパート7名に対する半構造的インタビューを行った。暗黙知は経験によって培われ、看護師の実践を支えていることはわかっているが、それを言語によって明らかにすることは困難である。そこで研究方法を慎重に検討し、テーマ分析によってデータをより文脈として捉えるようにした。現在、分析の途中であるが、例えば『本人の希望を細やかに取り入れる』『体位の「ベース」を作って個別性を足す』『体位変換がうまくいくように時間の調整とうまくいかなかったときの善後策を持つ』『本人の好みと、看護の目的との調整』『違和感の解消』『好みの体位や姿勢の事前の把握』『クローズド・クエスションによる体位の確認』といったテーマが見いだされた。これらは神経難病看護師の多彩な暗黙知の一部と考えられた。

次に、神経難病看護師の感情体験についてエキスパート15名に対する半構造的インタビューを行った。ここで感情体験は、先行研究から、出来事や状況などによって感じられる心の中の動き、具体的には不安、恐れ、驚き、怒りなどの否定的感情や喜び、幸福などの肯定的感情、およびそれらの感情に対する対処行動など、幅広い体験の総称とした。結果を帰納的に分析した結果を述べる。肯定的感情では、『患者の肯定的変化や反応に対して抱く嬉しさ』『患者理解を深化させるなかでみつける喜び』『満足のいく看護を提供できた時に抱く喜び』『患者に頼りにされる時に抱く嬉しさ』『患者との双方向の関係を感じた時に抱く嬉しさ』『自分の看護が家族から評価され、感謝された時に抱く嬉しさ・意欲』『難病患者・看護と出会えたことへの喜び』『看護師としての自信・決意』『チームでの協働・成長に対して抱く喜び』の9カテゴリーが生成された。否定的感情では『患者に対して抱く怒りや苦しさ』『十分なケアが提供できたかという後悔や不安』『神経難病看護の困難感』『患者に対して怒りを抱いてしまった自分に対する怒りや悲しさ』『患者を傷つけた経験からくる恐怖』『多忙さのなかで十分なケアを提供できない怒りや苦しさ』『進行し治らない難病の特性に対する無力感』『告知や意思決定の重大場面に関わる苦しさ』『患者から認められない辛さ』『難病看護師としての役割を果たす苦しさ』『患者にひどい対応をする看護師の姿に対する怒りや悲しさ』『チームで協働できない苦悩』の12カテゴリーが生成された。そして対処については、否定的感情を惹起する問題状況に対して積極的に働きかける対処と看護師自身の感情を調整する対処がみられ、前者として『スタッフ間でケアを共有し、患者への対応を導く』『業務調整を行いチームで補完する』『良い方向に向かうように患者に働きかける』『経験を次のケアに活かす』『自分の知識を向上させる』『組織の中で神経難病看護の地位を高める』の6カテゴリーが生成された。また、後者では『自分の認識を改め、患者主体に考える』『患者と関わる』『感情を表出する』『オンとオフで気持ちを切り替える』の4カテゴリーが生成された。

我々は、以上の取り組み以前に、経験年数3-5年の中堅看護師を対象にその看護実践を明らかにしてきた。そこでは、自分の内面や看護実践に関する様々な気づきがあった。しかし、今回対象としたエキスパート看護師のデータにおいては、より具体的な感情および対処、そして暗黙知が見いだされた。

第2段階(2021年度～2023年度) 神経難病看護師の症状看護を促進する新たなリフレクションプログラム再構築

この段階では、神経難病看護師の症状看護を促進する新たなリフレクションプログラム再構築を目指す。

参加者は神経内科病棟に勤務するエキスパート看護師 10 名である。オンラインでのリフレクションプログラムを計 2 回開催した。第 1 回目では、前回のリフレクションプログラムに加えて、計画の中のセッション (A) 導入として、我々より研究の経緯や着目している暗黙知や感情体験についての説明を行った。これらによって参加者に経験の想起や感情を表現することへの躊躇いの軽減を図った。さらに、講師を招きリフレクションとは何かについての講義を参加者全員で聴講したのちに、ディスカッションを行った。第 2 回目は、計画の中のセッション (B) として、リフレクションノートの内容をそれぞれ発表する(経験の想起・描写、感情表出)、に関連して自由に討議する(推論、経験の分析、評価)、次の実践に向けて活用できそうなことや課題、および自分の向き合い方を討議(アクションプラン)を行った。

参加者からのアンケート結果では、7 名が回答し、回答者全員が「理解できた」「役に立つ」といった肯定的な回答をした。さらに、自由記述では「神経難病看護の葛藤について共感する場面が沢山あり同じ気持ちで看護している方の意見を聞く事ができて今後の看護に繋げていきたいと考えました。患者さんや医療者の考えや行動をリフレクションで整理する事が患者さんにとってどうだったのかを振り返る機会となりました。」「振り返ることで明確な答えや正解を必ずしも出すことなく、新たにどう患者さんと関わり、また私たちはどういう姿勢でいるのが良いかの視点を共有できたかなと思います。患者さんもですが、私たち看護師も心の揺れがあり、それを自分の胸にしまいこむのではなく、言葉にすることで何をどのように感じたのかを自分自身でも整理ができたと感じます。」など、次の実践につながる回答を得た。

今後は、神経難病看護の暗黙知について引き続き検討を重ねることで、キャリアの少ない看護師への教育に資する報告を継続する。また、リフレクションプログラムの活用について学会等を通じて広く浸透させていくことが課題である。

引用文献 (研究者以外)

Clemenzi A, Pompa A, Casillo P, Pace L, Troisi E, Catani S, Grasso MG. Chronic pain in multiple sclerosis: is there also fibromyalgia? An observational study 20 : 758-766 , 2014.

上田静子 福山 さおり, 大山 由紀子. 神経難病看護研修受講者の学びの分析. 大津市民病院雑誌 . 13 : 51-52, 2012

佐藤純子 岩田 美紀, 舟山 文子, 須貝 緋登美, 管野 清子. 在宅重症難病患者支援の取り組み 神経難病看護研修会を開催して. 国立病院総合医学会講演抄録集 68, 893, 2014

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森谷利香 山本裕子	4. 巻 28 ( 3 )
2. 論文標題 神経難病患者の症状に対する看護の充実に向けた看護師への支援プログラムに関する研究 知覚異常に焦点を当てて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 難病と在宅ケア	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森谷利香 山本裕子	4. 巻 29 ( 2 )
2. 論文標題 神経難病患者のケアに携わる看護師の感情体験に関する質的研究 ~感情に焦点を当てて~	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 難病と在宅ケア	6. 最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本裕子 森谷利香	4. 巻 29 ( 3 )
2. 論文標題 神経難病患者のケアに携わる看護師の感情体験に関する質的研究 ~対処に焦点を当てて~	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 難病と在宅ケア	6. 最初と最後の頁 30-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 森谷利香 山本裕子
2. 発表標題 神経難病患者のケアに携わるエキスパート看護師の感情体験に関する質的研究 感情に焦点を当てて
3. 学会等名 第27回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本裕子 森谷利香
2. 発表標題 神経難病患者のケアに携わるエキスパート看護師の感情体験に関する質的研究 対処に焦点を当てて
3. 学会等名 第27回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuko Yamamoto, Rika Moriya
2. 発表標題 Issues in nursing intractable neurological disease patients with dysesthesia among nurses with 3 to 5 years' experience.
3. 学会等名 26th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森谷利香 山本裕子
2. 発表標題 神経難病患者の知覚異常に対する看護の充実に向けた看護師への支援プログラムに関する研究
3. 学会等名 日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本裕子、森谷利香
2. 発表標題 神経難病患者の知覚異常に関する看護師のリフレクションプログラムについての研究 - 実践で経験する困難 -
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森谷利香, 山本裕子
2. 発表標題 神経難病患者の症状緩和に取り組む看護師に対する支援プログラムの開発
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森谷利香 山本裕子 前田有為子
2. 発表標題 神経難病看護師の暗黙知：ALS 患者の体位変換に焦点を当てて
3. 学会等名 第28回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	山本 裕子  (Yamamoto Yuko)  (40263272)	畿央大学・健康科学部・教授   (34605)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	宮本 勝一  (Miyamoto Katsuichi)		
研究 協力者	前田 有為子  (Maeda Uiko)		



7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------